

真実心の成就

和田 真雄

真実報土へ往生する為には、清浄真実なる因を成就しなければならぬ。しかしながら、現実の自身は凡夫であつて虚仮雑毒でしかあり得ない。宗祖は「信巻」に、

一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢惡汚染にして清浄の心なし。虚仮諛偽にして真実の心なし。衆生は雑毒虚仮でしかあり得ないと言われる。さらに『歎異抄』第九章には、

踊躍歡喜のころもあり、いそぎ浄土へもまいりたくそうらわんには、煩惱のなきやらんと、あやしくそうらいなまし。と、いささかでも煩惱の無くなるようなことがあれば、かえつて「あやしい」事であると説かれて、煩惱熾盛である凡夫の現実を見すていささかの虚飾も許されない。

それならば宗祖は、このような凡夫の上に、真実心、清浄真実なる往生の因がどのようにして成就すると説かれるのであろうか。宗祖は信心獲得をもつて真実心の成就、往生の因成就と説かれるけれども、決して信心そのものによって即座に往生が成就すると言われる訳ではないように思われる。なぜなら『行巻』に両重の因縁を明され

真実心の業識、これすなわち内因とす。光明名の父母、これすなわち外縁とす。内外の因縁和合して、報土の真身を得証す。

と、信心は光明名号の外縁を俟つて報土得証の因となると言われ、又、『愚禿鈔』には、正定聚不退を、

真実浄信心は、内因なり。摂取不捨は、外縁なり。

と、やはり如来摂取を外縁として信心が正定聚不退の因となると言われるからである。

ところで信心は、如来成就の疑蓋無雜の信樂が衆生へ廻向された真実信心である。この真実信心が尚外縁を必要とすると言われるのはどのような理由によるのであろうか。

金子大榮氏は、如来廻向の行信の獲得について、廻向によって賜わりたる行信であるならば、そのまま自身の行信と言ひ得るかと問ひを出され、それに答えて

それには「然り」とも「否」とも答えることができない。

「然り」と答へられない理由は、我等の反省において感ぜられるものは、清浄の信樂なく真実の信心がないという事実だけであるからである。「否」と答へられない理由は、その反省において疑いなきものは如来の大悲の願心であるからである。(教行信証の諸問題)

と言われる。又宗祖が、

浄土真宗に歸すれども、真実の心はありがたし、虚仮不実のわが身にて、清浄の心もさらになし。

(愚禿悲歎述懷和讃)

と言われる如く、衆生が雑毒虚仮でしかあり得ない為、如来廻向の信心もそのままでは往生の因、清浄真実心として固定的実体的には成就しない。それが雑毒虚仮なる凡夫の現実の姿であると言わなければならない。それ故、かかる凡夫に往生の因、清浄真実心を成就せしめんとされる如来の大慈悲心は、

十方群生海、この行信に帰命すれば撰取して捨てたまわず。かるがゆえに阿弥陀仏と名づけたてまつると。これを他力と曰う。

(行巻)

と説かれるように、必ず撰取不捨なる働きを外縁として働き出すことによって衆生の信心を報土往生の内因たらしめる。このように、外縁によって衆生に清淨真実心を成就せしめ、報土往生を成就せしめるが故に、始めて凡夫のままなる往生が成り立ち他力往生と言ひ得るのである。

即ち信心は、固定的実体的に清淨真実心として成就するのではなく、如来によって常に清淨真実心たらしめられ、結びつきの中で因となりゆくものとされるのである。

さらにその上、信心が如来の外縁によって内因となり、衆生と如来の関係の内に往生の因となりゆくという事も決して固定的実体的に成就するものではない。曾我量深氏は、『歎異抄』第九章を解説して、

真実に我々浄土真宗の信者としての立場というものは、そのように一念帰命と後念相続との二つの立場があるのではなく、常に信の一念に立つということではなければならぬと私は信ずるものであります。決して、信の一念の立場に立ってしまつて、信心を得たから我々は現在に後念相続に立つものであると、考うべきものではない

(歎異抄聴記)

と言われる。即ち往生の因とは、帰命の一念に衆生と如来が真に關係を持ち得た、その結び付きそのものの内にあって始めて因の成就があり真実心の成就がある。

しかれば、清淨真実心を成就せしめられる如来と衆生の關係とはどのようなものであろうか。

信心をして往生の内因とせしめた如来撰取の働きは、同時に信心を發起せしめた働きであり、さらに信心發起以前より常に自己に働きかけていた働きである。しかるに衆生は自力に執着して、

わがみをたのみ、わがところをたのみ (一念多念文意)

が故に、かかる如来の働き大慈悲心を明らかにすることができなかった。それ故、一度他力に帰したとしても、「わがところをたのみ」心が起こり自身の存在を自己肯定する、即ち、自身を往生人と自己肯定し後念相続の身とするならば、その時如来と衆生の關係はとぎれてしまうのである。

それ故、如来と衆生の真なる關係は、衆生が自力の心を捨て、即ち

善惡凡夫の、みずからがみをよしとおもうところをすて、みをたのみず (唯信鈔文意)

という信の一念に立ち続けることによるのであり、「浄土真宗に帰すれども、真実の心はありがたし」と、常に自己を良しと自己肯定せんとする自力心を否定し続ける常なる自己否定、凡夫であるという自覚の上にも、真実の關係結び付きが成り立ち、如来によって真実心を成就せしめられてゆく場があると言えるであろう。このように宗祖は、罪惡深重の凡夫を救わんとされる如来の大慈悲の呼びかけ、即ち、「汝は是れ凡夫なり、心想羸劣」という如来の勅命に應えて、「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫」と深信し妥協なく自覚し続けるという如来と衆生の呼応の内に如来によって真実心が成就せしめられてゆくことを明らかにされる。このような実体的でなく、呼応の内に成就せしめられ続ける往生の因真実心であるが故に、凡夫のままなる真実報土への往生が可能となり成就せしめられてくるのである。